

米国福音派の教会における女性教職論

國重 潔志

序論

キリスト教会が女性に按手を行い教職⁽¹⁾とし始めて約一五〇年ほど経過したが、女性教職の是非についての教会の公同的理解は得られていない。教団・教派によって肯定的であったり否定的であったり、積極的であったり消極的であったりと理解の幅が見られる。福音派と呼ばれる教会においても、こうした理解の幅は同様に存在し、福音派としての統一した見解というものは無いように見える。

現在のこうした女性教職の理解の幅について、本論文はその神学的文脈を直面した時代状況なども含めながら歴史神学的に考察を試みるものである。そして以下の二つの理由から、特に米国の福音派に焦点をあてたい。後に詳述するが、教会歴史上初の女性教職は米国福音派の教会から現れ、教団の総意として女性に按手を施し始めたのも福音派

の教会からである。したがって、米国の福音派の女性教職論を考えることは、キリスト教会が女性教職に踏み切るに至る前後を理解する助けとなると考えられる。また、日本の福音派の教会とその神学は、米国の福音派の影響を大きく受けてきており、米国福音派の神学の女性教職論を考察することによって、日本の福音主義神学における女性教職問題を検証することに資する面があるとも考えられる。

米国の福音派における女性教職問題を論じるに当たり、おおまかに二つの期にわけて考えたい。十九世紀のアメリカにおいては、福音派の教会が率先して女性に按手していたが、二十世紀において福音派の教会は女性教職に消極的な面も表れるようになってきた。そうしたことから、本論では十九世紀米国における按手開始前後と、その後の二十世紀における展開とに分け、それぞれの歴史的経緯と背後にあった神学的確信をとらえてみたい。

さて、ここで「福音主義」、あるいは「福音派」という言葉について確認しておく。宗教改革以来よく用いられてきた福音主義という言葉であるが、ジョージ・マルステンとドナルド・デイトンの間の論争に代表されるように、福音主義、あるいは福音派の意味するものに関して議論が続いており、福音派の歴史的・神学的実体に関してのコンセンサスはとれていない⁽²⁾。ここでその論議に深く入ることはできないが、現行の福音派の教会の多くが十九世紀米国リバイバルズムとその後のファンダメンタリズム、またネオ・エヴァンジェリカルズム⁽³⁾と何らかの関係を持ち、また女性教職はこのリバイバルズムのなかで生じてきたことを鑑み、ここでは、「リバイバルズムの流れに影響を受けた聖書の権威を尊重した教会とその流れ全般」を福音派と呼称し、この福音派の教会が女性教職に関して歴史的にどのような神学的立場をとったのか考察していきたい。

按手開始前後

A 歴史的発展

1 宗教改革後のヨーロッパ

旧約聖書と新約聖書において女性預言者の存在が明らかにされており、新約聖書においては女性にある程度の指導的役割があったことが見られる。使徒後の初代教会において、おもだった教会の指導者はすべて男性であったが、女性の与えた神学的影響も無視することはできない。しかし、女性が按手された教職として表舞台に立つことは長らくなかった。

この流れに一つの変化をもたらしたのが、宗教改革である。信仰者万人司祭論は理論上、女性教職の可能性を拓くものであり、実際にカルヴァン自身も女性の教会内の地位についての变化を受け容れ始めていたと見られる⁽⁴⁾。女性のセクシュアリティが本質的に悪ではないと見なされ、聖職者の結婚が始まり、牧師婦人らはある種の指導的役割を教会内で果たしたと見られる。信仰者万人司祭を掲げた結果、執事・長老・教師などといった役職に女性が就く道も少しずつではあるがひらけはじめた。カルヴァンのジュネーヴにおいて、女性執事が存在したかどうかという歴史的証拠は存在しないが、マリアとマルタの例にならない、特に未亡人女性らの中で教導的役割を担った女性執事が存在したという例がみられる。

バプテスト教会においては、女性の登用にさらに積極的な姿勢が見られた。一七世紀のイギリスから女性のバプテスト説教者が精力的に活動した。例えば一六四〇年代にイギリスのプリストルに設立されたブロードミード・バプテ

スト教会はドロシー・ハザードのリーダーシップによって設立された。ウエスレアン系では、ウエスレー自身女性説教者の登用を認め、ウエスレー没後、メソジスト教会に大きな影響をもたらしたアダム・クラークも、女性の働きに関して積極的立場をとった。

2 女性教職を送り出し始めたアメリカの教会

ヨーロッパでは、少しずつではあるが女性の登用が広まりつつあるなか、女性に対し正式に按手を施したのは米国であった。一七九五年からリバイバルの波が米国で始まると(The Second Great Awakening)、リバイバルズムの流れにあるプロテスタント系の教会やセクト系の教会の多くの女性たちが教会で説教を始めた。米国初の女性たちによる宣教会、ボストン・フィメール・ソサエティは、メリー・ウェブをリーダーとし、会衆派とバプテストの女性たちによって一八〇〇年に結成され、一八一五年にはフリーウィル・バプテスト教会が女性に説教を行うライセンスを与え始めた。

ついには一八五三年九月一日、米国ニューヨーク州サウス・バトラーにある会衆派の教会にて⁽⁵⁾、アントワネット・ブラウン⁽⁶⁾が教会歴史上初めての女性教職として按手された。彼女は一八二五年にニューヨーク州のロチェスターに生まれ、チャールズ・フィニーから大きな感化を受け、オウベリン大学で学び、一八五二年にニューヨーク州、サウスバトラーの第一会衆派教会の牧師となった。一八五三年にニューヨーク市で開かれた世界禁酒運動大会で三時間にわたる熱弁をふるい、教会に戻った後按手を受けた。按手礼説教を行ったのはウエスレアン・メソジスト教会の年会議長、ルサー・リーである⁽⁷⁾。

ウエスレアン・メソジスト教会(現在のウエスレアン教会)は、当時奴隷制度を黙認していたメソジスト監督教会に抵抗したオレンジ・スコットら一派が、メソジスト教会から分離して形成した教会である⁽⁸⁾。当時のウエスレアン・メソジスト教会の年会議長であったリーは、女性差別問題にも注目しており、女性に按手することに肯定的な立場をとっていた。この教会は一八四三年に女性の権利大会⁽⁹⁾を主催し女性教職に対しても肯定的な立場を既に打ち出していたが、リー議長は、キリスト教会史上初めて女性が按手されるに当たって会衆派の教会に赴き按手礼説教を行った⁽¹⁰⁾。この按手は会衆派の教会であったため、その会衆による独自の決断という面があったが、一八六〇年代に入るとウエスレアン・メソジスト教会は教区単位で女性に按手を施しはじめ、一八九一年の総会にて女性を教職としてきたことを確認した。

メソジスト系では、救世軍が女性教職に関して最も積極的であった。一八七〇年の設立時に救世軍は女性教職をすでに認めていたが、この教会の設立者ウィリアム・ブースの妻、キャサリン・ブースは結婚前から女性の権利に高い関心を持ち⁽¹¹⁾、女性の教会内の活動を押し進めるための著作活動を続けた。夫のウィリアムが病気で講壇に立てなくなると、彼の代わりに精力的に説教し、会衆も喜んで耳を傾けた。他にも、ホーリネス・リバイバルズム・ムーヴメントによって十九世紀末から設立されていったチャーチ・オブ・ゴッド・アンダーソン、ナザレン教会、そしてピルグリム・ホーリネス教会⁽¹²⁾などはいずれも女性教職を公式に認めた。そうしたことから、これらのホーリネス系の教会では十九世紀末期頃教職者全体の二―三割を女性が占めるようになった。またピラー・オブ・ファイア(現在のペントコスタル・ユニオン)というこのホーリネス系の小さな教団は、教会歴史上初の女性監督を送り出した⁽¹³⁾。女性に対する教育の機会や参政権などが著しく制限されていた当時を考えると、女性の登用についていかに積極的な姿勢をとっていたかが伺い知れる。

バプテスト系も早くから女性の説教者に対して肯定的であり、例えばテキサス州、ダラスにある第一バプテスト教

会もルシнда・ウィリアムスの指導するグループによって一八六八年に始まっており、他にも多くの場所において女性伝道師が活躍した。ゴードン大学とゴードン・コンウェル神学校の設立に尽力したA・J・ゴードン⁽¹⁴⁾は、女性が教会の公の場所で語ることに對して否定的な意見が出されたのをうけて、女性の公の場所での説教を擁護する論文を発表した⁽¹⁵⁾。十九世紀後期になると、バプテスト教会のコンヴェンションまたカンファレンスなどで女性教職を認め始めた。一八八九年チャーチ・オブ・ザ・ユナイテッド・プレズレン・イン・クライストは女性を教職とすることを認め、一八九五年にはナショナル・バプテスト・コンヴェンション、そして一九〇七年には北部バプテスト・コンヴェンションは女性教職を正当とみなし、一九一八年にはバプテスト・ジェネラル・カンファレンスも女性教職を認めた⁽¹⁶⁾。

改革派系では、長老派系は女性教職について比較的慎重な態度をとった。十九世紀において女性らによる宣教会が結成され海外において女性宣教師は活躍したが、米国内において女性が按手を受けて牧師のように活動することは、長老派系の教会では期待されていなかった。しかし、フィニーなどに代表されるリバイバルズムと比較的近い立場にあった改革派系の教会は女性教職に肯定的な姿勢をとった。例えば、北欧から北米への移民らを中心に十九世紀末に構成されたエヴァンジェリカル・フリー教会(Trinity Evangelical Divinity Schoolで有名)は、巡回伝道者のみならず定住の伝道者にも女性を登用していた⁽¹⁷⁾。またこの教会のフレデリック・フランソン⁽¹⁸⁾は、「預言する娘たち(The Prophesying Daughters)」というパンフレットを著して女性による説教を擁護した。一八八八年にはデイサイプルス・オブ・クライスト、そしてやや時期をおいて一九二二年にカンバーランド長老教会も女性教職を認めた。ドワイト・ムーディはムーディ聖書学校を設立するにあたって女性の入学者を認め、そこで学んだ女性たちはムーディやピリー・サンデイらの働きに積極的に参画した⁽²⁰⁾。その後、一九四八年にエヴァンジェリカル・アンド・リフォームド教

会も女性教職を認めるに至った。

上述の教会はある程度の数の代表者らが集まり協議し決定したものであるが、教会の政治機構上、各教会の自主判断に任されているタイプの教会、また特に女性教職を禁じていなかった教会で、この前後に女性に按手を施し始めた教会は、アドヴェント・クリスチャン教会(一八六〇)、ユニヴァーサリスト・チャーチ・オブ・アメリカ(一八六三)、クリスチャン教会(一八六七)、アメリカン・ユニテリアン・アソシエーション(一八七二)、フレンズ・ユナイテッド・ミーティング(一九〇二)などがある。

このように、十九世紀に於いて福音派の各派とユニヴァーサリズム系の各教会は女性教職を認め始めた。今日のフエミニズム神学に對し比較的高い親和性を持つプロテスタントの主流派教会が女性教職に踏み切り始めた二十世紀半ばよりも約一世紀前から、福音派はすでに女性教職を送り出していた。

B 女性教職誕生の理由

旧約聖書の時代から信仰共同体の中で女性がある種の指導的役割を担ってきたが、按手を受けた聖職者として正面に立つことは長らくなかった。それが何故この時期になって米国で女性教職が出現してきたかを考えると、少なくとも以下の二つの理由が考えられる。一つはこの時期の米国において論争的であった奴隷制度問題とキリスト論的平等主義、そしてもう一つは当時のリバイバルズムに顕著であったディスプレイションナリズムを土台とする聖霊論的聖職者観であろう。

1 人種・性別差別問題とキリスト論的平等主義

一九六〇年代の米国における公民権運動が現在のフェミニズムの興隆に寄与したように、一八三〇年代以降における奴隸制廃止論が女性教職の道を拓くにあたった大きな影響を与えたと考えられる。キリストにあつて一つ（ガラテヤ三・二八）というキリスト論的平等性などを根拠に奴隸制反対を主張したクリスチャンたちは、その確信を単に奴隸制問題のみならず、社会全般の問題一つ一つに適用しはじめ、女性差別の問題にも取り組み始めた。

社会問題に積極的に取り組む姿は、現在の福音派においてやや異質なものと見えるかもしれないが、十九世紀の福音派は積極的に取り組んだ。例えば二十世紀の福音派を代表する人物、ピリー・グラハムは聖職者の使命を福音宣証と位置づけ、社会問題や政治問題に関わることを二次的なものとしたが⁽²¹⁾、そのグラハムと関係の深いホイートン大学の設立過程を見ると、非常に興味深いことが浮かび上がってくる。ホイートン大学は福音派の中で最も古く、また多くの福音派の指導者を輩出してきた大学であるが、もともとは反奴隸制の立場を当時最も強く持っていたウエスレアン・メソジスト教会によりイリノイ・インスティテュートとして一八四八年に建てられた。その後、経済的にこの学校を維持していくことが困難になり、一八六〇年に会衆派が運営に携わるようになったものの、当時のウエスレアン・メソジスト教会が堅持していた奴隸制反対に代表される社会悪への高い関心は貫かれた。会衆派らによる運営体制が整えられるなかで招かれた初代の学長、ジョン・ブランチャードは、福音派の中で著名な反奴隸制の指導者であり⁽²²⁾、ホイートン大学に招かれた際、完全な状態の社会とキリストの御国の実現に熱心に取り組み、新約聖書の語る平等のつとり奴隸制の完全な撤廃を目指す⁽²³⁾と宣言した。

これはブランチャードに限らず、当時福音的リバイバルの指導者の一人でオウベリン大学において大きな影響を与えたチャールズ・フィニーにも見られた⁽²⁴⁾。フィニーは罪の本質を自己中心と理解し、キリストによる個人的な

回心経験の後は、神への愛、隣人愛というかたちに現れる自己中心から遠くあるクリスチャン生涯を訴えた。その結果、極端な予定論に安じて愛の実を結ばうとしないクリスチャンらをフィニーは批判し、クリスチャンが具体的な社会悪に対して熱心に取り組むように励ました。社会改革はリバイバルに続くものであり、愛の業の怠りはリバイバルを押しとどめるものと理解したフィニーは、奴隸制度を黙認するクリスチャンらを特に激しく批判した⁽²⁵⁾。

こうした著名な指導者に限らず、当時の福音派は個人的な回心の経験とそれに続く愛の業を強調し、特に奴隸制反対問題に積極的に取り組んだ⁽²⁶⁾。この奴隸制反対の強調が、福音派を女性差別問題の存在にも目を向けさせた。そうした動きの最初の例の一つとして、アンジェリーナとサラ・グリムケ姉妹⁽²⁷⁾らが挙げられる。この姉妹は女性が公の場所で語る権利について主張し、性別の平等に関する手紙（*Letters on the Equality of the Sexes*）を一八三七年に出版した。この中でサラ・グリムケは奴隸の立場と女性の立場を比較しつつ、女性差別の実態を鋭く批判した。このように人種差別問題に敏感になっていった福音派は、キリストにあつて一つというキリスト論的平等主義を男女差別問題に対しても向け始めた⁽²⁸⁾。

こうした動きが福音派のなかで拡がるなか、人類の歴史上初の男女共学の大学が福音派から誕生した。これがオハイオ州シンシナティ市にあったレイン神学校から分離した生徒らによって一八三五年に設立されたオウベリン大学である。レイン神学校に在籍していたセオドア・ウエルドを中心とする学生たちは、奴隸制反対組織を結成し、行いの無い信仰は死んだものとの確信に立ち奴隸制度とそれを支える人種差別主義に公然と抵抗した⁽²⁹⁾。その結果、奴隸制度擁護の立場にあった保守層によって占められていた学校と理事会側からこうした学生らに圧力がかけられ、信仰と行いの自由を求めて学生たちはレイン神学校からの分離独立に踏み切った⁽³⁰⁾。こうしてオウベリン大学を設立するにあつて、彼らは奴隸制のない平等社会実現の主張を男女の機会均等問題にも敷衍させ、歴史上初の男女共学の大学を

設立した⁽³¹⁾。教会史上初の女性教職であるアントワネット・ブラウンはこのオウベリン大学にて神学教育を受け、他にも多くのオウベリン卒業生が女性権利活動家として活躍していった。

今日の米国におけるフェミニズムの興隆の源流を探っていくと、そこに十九世紀福音派があったことは意外と知られていない。例えば、夫婦別姓を主張したルーシー・ストーン、また第二回女性権利大会のプレジデントであったベッツィ・カウルスは、オウベリンの卒業生である。上述のグリムケ姉妹は、聖書の翻訳の作業において男性の感性の及ぼす影響と聖書原語のニュアンスについて論じ、ホーリネス系の伝道者で女性教職擁護の *Women in the Pulpit* を著したフランシス・ウィラードは婦人参政権の活動家としても有名であった。A・B・シンプソンも *Echoes of the New Creation* において、イエス・キリストの男性面を過度に強調することによって女性を従属的立場におくことに反対した⁽³²⁾。

十九世紀当時の福音派の持っていた社会的関心の高さ、そして彼らの持っていた信仰と善行のバランスについて議論はあるものの、彼らが善行について高い関心を持っていたことは明かである⁽³³⁾。現代の米国において福音派は保守派であり、伝統的社会的通念を守ろうとする勢力であると理解されることもあるが、十九世紀においては逆で、福音派こそが、奴隷問題や人種差別問題、また女性差別問題、孤児や未亡人らまた経済的困窮者らの問題について非常にラディカルなアジェンダを持っていた⁽³⁴⁾。

確認するが、十九世紀福音派において社会改革を個人の救いよりも優先させる姿勢は無かった。例えばオウベリン大学設立の過程において奴隷制問題は主要な論点の一つであったが、この大学においての最も大切な課題は罪からの回心と聖化であるとフィニーは重ね重ね強調した⁽³⁵⁾。オウベリン大学内では宣教活動なども盛んで、設立後僅か一年で学内に六つの宣教会が組織され、特にアメリカ・インディアンへの伝道に強調がおかれた。そうして個人の救いを

強調する一方で、キリストにあつて一つというキリスト論的平等観から人種差別・女性差別問題にも精神的に取り組むというバランスを形成した⁽³⁶⁾。その結果十九世紀の米国の福音派は、女性に対する教職の道が閉ざされていることにキリスト論的平等観から疑問を抱くようになった。

2 デイスペンサーシヨナリズムと聖霊論的聖職者観

ウエスレアン教会の年会議長、ルーサー・リーのアントワネット・ブラウンに対する按手礼説教を読むと⁽³⁷⁾、十九世紀の米国福音派が女性按手に踏み切った神学的確信がにじみでている。使徒行伝にみる初代教会における先例、ガラテヤ三・二八によるキリストによって実現された男女の平等性、そしてヨエル書二・二八と、それに呼応する使徒二・一七からの聖霊の傾注による女性教職の正当性が論じられている。聖霊によって息子も娘も預言すると聖書にあることから、男性のみが教職に就くことはペンテコステ以降の教会に相応しくないという理解である。

教会の雛形を論じるに当たり、天地創造における原初の栄光、アブラハムへの召し、あるいはイエス・キリストと弟子たちなどといった色々な点をキリスト教会は論じてきたが、十九世紀のリバイバルズムは、ペンテコステを教会形成の神学と実践の基準とすることが多かった。神からの召しと聖霊の満たしという両者があつて、はじめて教会の聖職者として立つことが出来るという考え方である。このペンテコステの出来事において、男性も女性も聖霊に満たされて預言するという聖句から、リバイバルズムは聖霊論的に女性教職を妥当とし始めた。かつて宗教改革後のプロテスタントが万人司祭をもととしたキリスト論的女性の登用を考えたのに対し、十九世紀リバイバルズムは聖霊論的展開によって女性教職を肯定した。神が女性に対して聖職者としての召しを与え、聖霊が当該女性を満たしているの

に、それをどつして人がとどめることができなかつ、という主張である⁽³⁸⁾。

救世軍のキャサリン・ブースの著した *Female Ministry* というパンフレットにてペンテコステとは女性にも男性と同様の役割が聖霊によって与えられた出来事であるとキャサリン・ブースは論じ、人の偏見と習慣によって女性の機会が制限されていることを非難した。ホーリネス系において多大な影響を与えたフィビー・パーマーは⁽³⁹⁾、ホーリネスのリバイバルの盛んだった一八五〇年代において四二ページからなる *The Promise of the Father* (一八五九) を著し、その中で女性教職論を擁護した。彼女が編集を担当しホーリネス系を中心に広く読まれた「*Guide to Holiness*」誌ではペンテコステの出来事こそ、社会悪の根を断ち切る斧であり、ペンテコステが輝くほど女性たちが神の栄光のために公の場所で語り教えるといった論調が続いた。他にも、フリーメソジスト教会の設立におけるリーダー、B・T・ロバートによる *Ordaining Women* (一八九一)⁽⁴⁰⁾、ナザレン教会のファニー・ハンターによる *Women Preachers* (一九〇五)、W・B・トビヤンによる *Woman Preacher* (一八九一) など、こつしたペンテコステ的聖職者観⁽⁴¹⁾ に沿って著された。こつした傾向はホーリネス系に限らず、リバイバル系全般に見られた論調であり、例えばバプテスタのA・J・ゴードンも女性が公の場所で説教することを肯定する *The Ministry of Women* と題する論文にて、ヨエル書と使徒行伝二章から男性も女性も預言する聖霊の時代の到来を論拠とし、女性の公的役割の妥当性を論じた⁽⁴²⁾。

こつしたペンテコステ的教職観を支えた聖書解釈の背後に、当時の福音派において顕著であったデイスペンサーシヨナリズムの影響があつたと考えられる。聖霊の時代の到来というデイスペンサーシヨナルな歴史観に根ざした聖書解釈は、旧約聖書時代にあつた奴隷制度を根拠に奴隷制度を肯定する保守派の聖書解釈を拒絶した。ペンテコステ的聖霊の傾注によってうち立てられる新しい価値観と新しい平等性は、それ以前の価値観よりも優先されねばならないという考え方である⁽⁴³⁾。これらをもとに、福音派は旧約聖書における奴隷活用の事実をもつて奴隷制度を擁護する保守派を否定した。

女性教職反対論によく用いられたコリント一四・三四～三五については、それが女性教職に明確に反対する聖書中の唯一の箇所であり、聖書全体にみられる男女の平等性、特にキリストにあつての平等性と聖霊が男性にも女性にも注がれて預言することから考え、これは特定の教会の特定の事情についてパウロが書いてあるものであると当時の福音派は理解した。また、テモテ二・一二を女性教職問題と結びつける解釈にも疑問を呈し、女性教職を擁護することこそペンテコステ以降の教会のあるべき姿であると論じた。

キリスト教会は、イエス・キリストの時代から約千八百年間女性教職を持たずにきたが、十九世紀になってついに女性教職を輩出するに至つた。その歴史的背景、神学的文脈をみると、女性への按手開始に至つた一つの流れを見る。奴隷制度問題に対するキリスト論的議論をきっかけとして女性の地位について多くの関心が集まつたところに、聖霊論的聖職者観、神から召され聖霊が注がれた者は誰であつても教職となりうるという草の根のリバイバル系ムの教職観があつた。こうしてキリストにあつて一つというガラテヤ三・二八をもとにしたキリスト論的平等主義と、息子も娘も預言するという使徒の働き二・一七による聖霊論的教職論から、福音派の教会から、史上初の女性教職が誕生した⁽⁴⁴⁾。

按手開始後の展開

A 広がる女性教職の波

先に見たように、十九世紀の福音派は女性の按手に積極的であった。当時の主流派教団が女性に按手を施さなかった時代、福音派は女性の機会均等と女性教職を認め始めた。二十世紀に入ってもこの動きは続き、女性教職について比較的否定的であったファンダメンタリズム神学が興隆していた一九二〇年代においてさえ、いわゆるファンダメンタリズムと称される教会において当時としてはかなりの数の女性が教職として活動していた⁽⁴⁵⁾。こうした二重構造はいわゆるエリート神学者らによる神学的声明ではなく、それぞれの信仰的確信に基づいて行動するというリバイバルズム系特有のグラス・ルーツ的体質が原因であろう⁽⁴⁶⁾。

二十世紀に入り、リバイバルズム系の教会が女性に按手を施し始めて約一世紀ほど経って主流派教団も第二次大戦後から次第に女性教職を送り出すようになった。ユナイテッド・プレスビテリアン教会は、一九一五年に女性が執事に就くことを認めたものの、一九二三年に宣教会が再編成されると、それまでであった女性によって運営される女性たちの宣教会の独立性が失われた。これに際し、合同長老教会のジェネラル・カウンシルはキャサリン・ベネットとマーガレット・ホッジの二人に女性の教会内における位置づけについてのリサーチを託した。二人は一九二三年にホッジ・ベネット・リポートを発表し、女性を長老 (Elder) また牧師 (Minister) として按手する、女性を長老 (Elder) として按手する、女性を地方伝道師 (Local Evangelist) としての一年間の免許を与える、という三つの解決策を提示した。合同長老教会のジェネラル・アッセンブリーは、この三つの案を長老たちに送ったところ、女性を

長老として按手する案が受け容れられ、一九三〇年に女性を長老として按手するようになった。これによって、各個教会において女性はリーダーの一人として参画することができるようになったものの、聖職者として働くことは認められなかった⁽⁴⁷⁾。その後一九五三年にロチェスターの長老より女性教職を認めるための動議が出され⁽⁴⁸⁾、一九五六年に女性を教職とすることが正式に認められた。

米国メソジストも同年に女性教職を認め、一九六八年における、エヴァンジェリカル・ユナイテッド・プレスレンとの合同によってユナイテッド・メソジスト教会が誕生した際も女性教職は確認された。年代が前後するが、米国南部長老教会は一九六四年、アメリカン・ルーサレン教会とエヴァンジェリカル・ルーサレン・チャーチ・イン・アメリカは一九七〇年、そして米国聖公会 (エピスコパル教会) も一九七六年に女性教職を認めるようになった。また、一九七〇年代にはいって、保守的な教会のなかでそれまで女性教職をみとめていなかった教会のいくつかが方向転換をはかった。メソナイト教会は一九七三年に、北米フリー・メソジスト教会は一九七四年に、エヴァンジェリカル・カヴァンント教会、そしてリフォームド・チャーチ・イン・アメリカは一九七九年に女性教職を正式に認めるに至った。

B 消極的姿勢の波

こうしてプロテスタントの間では女性教職を認める動きが盛んになりはじめた一方、これに疑問を投げかける動きもあった。ローマ・カトリック教会と東方正教会は今日も女性教職を認めていないが、プロテスタントの福音派のなかにも女性教職に対して消極的な姿勢を打ち出す流れがでてきた。

福音派内のこうした消極的姿勢の代表的な声として、サザン・バプテスト・コンヴェンションにおける声明がある。

ザン・バプテストにおいては、もしも当該教会がよしと認めるならば、当該人物の性別、また教育の程度によらず教職となることができた。しかし、女性教職に関して議論は続き、一九八四年における「コンヴェンションにて、「按手による教会内での牧会と指導的役割以外の全ての教会生活と働きの中で女性の働きを推奨する」という一文を含んだ決定事項を出した⁽⁴⁹⁾。これは一つの例であるが、福音派の教会において、女性教職に消極的な姿勢が見られるようになり、絶対数においても女性教職者数の頭打ち、あるいは減少がみられるようになってきた。

この変化について、少なくとも三つの原因があると指摘されてきている⁽⁵⁰⁾。まず第一に、福音派の各教会が按手にあたって必要とされる学歴をセミナーレベル（大学院レベル）に上げ始めてきていることが考えられる。かつて草の根を主体とした福音派は、神よりの召しと聖霊の満たし、さらにある程度の学的訓練があれば誰でも牧師として按手を施し、教会や宣教地へ送り出した。その後福音派に中流階層が増えるにつれ、牧師に対するさまざまな要求水準も高まり、セミナーレベルの学的訓練を受けていることが期待されるようになった。セミナーの体制、また一般社会の女性に対する教育機会均等がいくらか改善されてきているとはいえ、女性が大学卒業後、もともとは独身男性が行く場所とされていたセミナーに進み修士号を取得するにあたっての経済的、また環境的難しさは依然として残っている⁽⁵¹⁾。

第二に考えられることとして、女性が何らかの指導的立場をとることに対する抵抗というものがある。いかにフェミニズムが興隆していても、女性による大統領の登場していないアメリカにおいて、これは文化的に深い問題である。ユナイテッド・メソジスト教会や救世軍では女性による指導者も珍しくないが、福音派においては、女性が前に立つて男性らを指導することを憚る声が女性からさえも聞こえてくる⁽⁵²⁾。また、かつては有色人種、また女性の立場改善に邁進した福音派であったが、参政権、また教育と雇用の機会均等などにおいてある程度の成果が認められ始め

女性差別問題から他の社会問題により多くの関心を持つようになったことも考えられる。

第三の点として、ファンダメンタリズム神学の影響が考えられる。ファンダメンタリズムの持つ特色として比較的良好に挙げられているもの一つに、近代主義の影響によってキリスト教が近代の文化に飲み込まれていくことへの抵抗姿勢が挙げられる⁽⁵³⁾。例えば一八九〇年から一九一〇年にかけて反リベラル色の強かった *Princeton Review* では、キリスト教がヒューマニズムかのどちらかの選択を迫る論調が多く、J・G・メイチェンなどは、自由主義神学を近代主義に影響されたキリスト教的ではあるが全く別の宗教とする姿勢さえ辞さない態度をとった。

ファンダメンタリズムの持つこうした近代の変化を好まない姿勢は、福音派の持ついた女性教職観にも影響を与えた。一九二〇年代の頃には、福音派たる以上、社会的関心を熱心に保持することは好ましくないとしようない。ソスがファンダメンタリズム内に大きくなり、また男女同権、そして女性教職を認める動きはキリスト教と異なるヒューマニズムに根ざした自由主義神学による社会的アジェンダであると理解する向きが現れるようになった⁽⁵⁴⁾。二十世紀になり、自由主義神学側からのフェミニズムが興隆するにつれ、この傾向はますます深まった。

ファンダメンタリズム系の聖書解釈のアプローチも、十九世紀福音派のものとは若干異なる。前述の通り、十九世紀の福音派は、デイスペンサー・シヨナリズムの歴史観に支えられた聖霊の時代における新しき照明をもとに、字義的な解釈よりも聖霊によって示される今日的意義の追求の方により重点を置いた。一方、ファンダメンタリズムにおいては聖書の第一義的メッセージが時代によって変えられていくことを警戒する方向が強くなったことから、コリント一四・三四―三五と、テモテ二・一一―一二の解釈にあたって、ファンダメンタリズム系はこれらの聖句を字義的にそしてどの時代、どの地域の教会にも全てあてはまるメッセージであると解釈するケースが増えた。これは、十九世紀の福音派がこの箇所を特定の時代の特定の教会に対するメッセージと解釈したことと対照的である。さらに、ファ

ンダメンタリズム系、特に保守系のプリンストン神学者らは、使徒の働きに記されたペンテコステ的聖霊経験が教職となるにあたっての重要な基準だとするリバイバル主義の主張を受け容れなかった。聖書という文字の重みを重視する神学傾向の流れにあって、ペンテコステ的聖霊経験による導きという個人の経験の強調は相容れないものである。ファンダメンタリズムに続くネオ・エヴァンジェリカルリズムの神学者らもデイスペンサーシヨナリズムを批判する傾向にあったことから、デイスペンサーシヨナリズムに根ざした聖霊論的教職論による女性教職擁護論を受け容れられない傾向にあった。このように、実際問題や社会問題に対する態度、そして教職観を支える神学的方向性が異なる以上、ファンダメンタリズム系とその後のネオ・エヴァンジェリカルリズムなどの女性教職観が十九世紀のリバイバル主義の教職観と本質的に対立するのは必然的な結果であろう。

二十世紀に入り、キリスト教会全般に女性教職を認める動きが広がる中、福音派は女性教職に関する姿勢に幅が出てきた。十九世紀において福音派はキリスト論的平等観と聖霊論的教職者観から女性教職を推進したが、福音派と一般社会の構造変化や近代主義対根本主義の衝突のインパクトなどから、二十世紀になって女性教職に消極的な面も現れるようになった。こうしたことから、女性教職に肯定的であり続ける教会、肯定的になった教会、逆に否定的となる教会、など複雑な様相を呈している⁽⁵⁵⁾。結果として今日、米国福音派にて女性教職に関するコンセンサスが無いという事態になってきている。

まとめ

十九世紀の福音派は奴隷制反対などにみられるように、キリストにあって一つというキリスト論的平等観と愛によって働く信仰により社会改革を率先して進めていくことを重視し、その姿勢を男女の機会均等の問題にもあてはめた。またデイスペンサーシヨナリズムを背景とする聖霊論的教職観をもとに本人への召しとペンテコステ的聖霊経験を教職の資質とする考えは、女性教職を送り出す神学的土台となり、リバイバル主義を中心に女性教職、そして女性監督さえも登場するようになった。

二十世紀に入り、女性教職を認め始める福音派の教会が増え続け、プロテスタントのメインラインの教会にも女性教職の波が広がっていった。その一方、聖霊論的教職観をさほど重視しないファンダメンタリズム系は、反モダニズム的精神ともあいまって女性教職に対し消極的な姿勢を見せるようになり、福音派の女性教職に対する見解は多様化している。

福音派における女性教職の歴史的立場は何であろうか。その答えは恐らく福音派、あるいは福音主義の定義によって変わってくるであろう。もしも福音派をファンダメンタリズム神学と定義するならば、福音派は女性教職に否定的だと言える⁽⁵⁶⁾。もしも福音派とは十九世紀のリバイバル主義に始まり、二十世紀以降はファンダメンタリズムとネオ・エヴァンジェリカルリズムの影響も受けてきた流れの教会とするならば、福音派の女性教職に対する姿勢は、肯定的・否定的の両方が混じったものと言える。筆者は、米国福音派はリバイバル主義とファンダメンタリズムやネオ・エヴァンジェリカルリズムから影響を受けてきていること、そして聖書の権威を告白するナシヨナル・アソシエーション・オブ・エヴァンジェリカルズに加盟する米国福音派の教会の七、八割が女性教職を認めていることを鑑み、

米国福音派は女性教職について肯定と否定の両方の意見が複雑に展開されてきたと理解する。

女性教職についてこうした理解の幅と複雑さを米国福音派は持っているが、これこそ米国福音派の福音派たる結果であると筆者は理解する。福音派は、十九世紀においては社会的弱者を福音の故に覚えて積極的に取り組み、二十世紀には真理が世俗化によって浸食されていく危険に対してやはり福音の故に熱心に対応した。その結果、女性教職という問題に関しても実際のな面や神学的な角度から積極的に論じ、女性教職が非常識であった時代に女性に按手を施して教職とし、また女性に按手する事が時代の流れであるかのように考えられ始めた頃に、やはりその「常識」に対して熟考を促した。女性教職の是非をめぐる議論は続いてきたが、父・子・聖霊の神によって与えられているこの福音に対して真剣であるが故に女性教職問題も真剣に扱つたという姿勢は福音派内において一貫してきた。今後も、福音に対して熱心であるが故に、福音を宣べ伝えているこの世にあって真摯な議論を積み重ねつつ、この女性教職問題に関して適切な答えを求めていく福音派であることを願ってやまない。

注

(1) 聖職者に関する用語について、ドイツでは牧師として按手された聖職者 *Ordained Minister* を便宜的に教職と訳す。同様に、*Elder*「長老」*Deacon*「執事」*Licensed Preacher*「執事」を訳す。

- (2) 福音主義とプロテスタントを指すものとして、少なくとも三つの流れがあると指摘されてきている。日本語や英語では「福音主義 (Evangelicalism)」と称されるが、ドイツ語にすると違いがはつきりする。第一の流れは宗教改革正統派を指すもので *evangelisch* 第二はドイツ敬虔主義をルーツとし特に米国リバイバリズムを中心とする流れで *Theologie der Erweckungsbewegung* 第三は *Pietismus*。そして第三はネオ・エヴァンジェリカリズムの流れで *Evangelikale Unterscheidung*。マルスラン・ライターの論争は、それらの三者の関係をどの位置づけるかである。ライターの立場を包括的に示すものとして、Donald Dayton, *Theological Roots of Pentecostalism* (Matachen, NJ: Scarecrow Press, 1987); *Discovering An Evangelical Heritage* (Peabody, MA: Hendrickson Publishers, 1976); トマス・ホーンの立場として George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture: The Shaping of Twentieth-century Evangelicalism 1870-1925* (Oxford University Press, 1980) などがある。
- (3) 一般に、ネオ・エヴァンジェリカリズムという用語を使いたしたのは、フラー神学校とハロッド・ジョン・オッキンガらとされている。第二次世界大戦後に始まった動きで、聖書の権威を主張するという点でファンダメンタリズムを継承しているが、ファンダメンタリズムの排他的ともとれるラディカルな姿勢を批判し、学的・実面的面で比較的オープンな姿勢をとった。現在はネオが省略され、エヴァンジェリカリズム (福音主義) と呼称される。ファンダメンタリズムとエヴァンジェリカリズムが混同されるケースが時折見受けられるが、神学面と実際面において両者はかなりの違いを見せる。例えば福音主義の定義に関して、「ヒラリー・グラハムに賛同する者たちのイデオロギー」というものがある。大雑把に見える定義であるが、現存する生粋のファンダメンタリズム系は、グラハムの神学と方法論が世俗化していると批判し、グラハムも極端な排他主義を敬遠することから、ファンダメンタリズムと福音主義の違いを示すものとしての的を射ている定義の一つであると考えられる。
- (4) シェーン・ダグラスはカルヴァンの持つ女性についての神学的理解について手頃なりサーチを提供している。Jane Dempsey Douglas, *Women, Freedom, and Calvin: The 1983 Annie Kirkcaldy Warfield Lectures* (Philadelphia: Westminster Press, 1985)。
- (5) 会衆派は、その神学的幅の広れも一つの特徴である。例えば、アメリカの自由主義神学の父と呼ばれる Horace Bushnell は

- 会衆派である一方、最初の女性教職であるアントワネット・フクロン、またフィニーやオウベリン大、またホイートン大などはリバイバリズム系の会衆派の流れに属する。ネオ・エヴァンジェリカルリズムを提唱したオツキングも（元々はホーリネス系であるが）会衆派である。
- (6) マントワネット・フクロン(Antoinette Brower 結婚後の姓はBlackwell)に関する以下の文献が手頃な情報を提供している。Antoinette L. Brown, "Exegesis of 1 Corinthians, XIV, 34, 35; and Timothy, II., 11, 12," *Oberlin Quarterly Review*, July, 1849; Lucille Sider Dayton and Donald W. Dayton, "Your Daughters Shall Prophesy: Feminism in the Holiness Movement" *Methodist History* 14 (1975): 67-92; Elinor Rice Hays, *Those Extraordinary Blackwells* (New York: Harcourt, Brace and World, 1967); Laura Kerr, *Lady in the Pulpit* (New York: Woman's Press, 1951); Aileen S. Kradtior, *Means and Ends in American Abolitionism* (New York: Pantheon Books, 1969) 44頁。エニテリアンの教会にて最初に按手された女性はオリヰマ・フクロンで、同姓のため混同されることもあるが、両者は別人である。
- (7) リーに関する、彼自身の手記も面伝のほか、トナルド・デイTONの編集による彼の説教選集の序文なども参照のしよう。Luther Lee, *Autobiography of the Rev. Luther Lee* (New York: Phillips and Hunt, 1882); Donald Dayton, ed., *Five Sermons and a Tract by Luther Lee* (Chicago: Holrad House, 1975).
- (8) 奴隷制問題を巡ってメソジストが分裂していた経緯、また当時のリバイバリズムの展開した奴隷制問題反対に関してデイTONがまとめたもの。Dayton, *Evangelical Heritage*, 35-84.
- (9) Seneca Falls Women's Rights Conventionの超教派的な大会で婦人参政権を主に提唱したが、他に女性教職登用も主張した。フアンタメンタリズムの勃興以来の改革派系のいくつかの教会は、リバイバリズム、またウエスレアン系やホーリネス系に批判的な傾向が見られるが、十九世紀の頃、ウエスレアン系と改革派系はリバイバリズムを軸に、神学的また実際的に互いに影響を与えあう、協同する面が多く見られた。参照: Nathan Hatch, "The Puzzle of American Methodism" *Church History* 63 (1994): 175-89; Donald Dayton, *Theological Roots of Pentecostalism*, 63-113.
- (10) ウィリアムは結婚前 "... woman has a fibre more in the heart and a cell less in the brain." キヤサリン宛の手紙に書いた。キヤサリンは、教育の機会が制限されていることなどが問題であると反論し、ウィリアムのステレオタイプ的女性観を批判した。その後キヤサリンはウィリアムが彼女に同意するまで彼の結婚を拒否した。
- (11) 設立者、セス・クック・リースは、一九四〇年代のナショナル・アソシエイション・オブ・エヴァンジェリカルズの発足にあつて功績のあつたポール・リースの父。この教会は後にウエスレアン・メソジスト教会と合併し現行のウエスレアン教会に至る。
- (12) この教団は、メソジスト教会の牧師夫人、アルマ・ホワイトによつて設立され、彼女はその教団の監督に選出され按手された。彼女は「Woman's Chains」というパンフレットを出版し、教会と一般社会における女性の権利の拡大を訴えた。なお、この按手は使徒継承性が明確でないことを理由に、ホワイトを監督として認めないとこの教会の女性監督に疑問を呈する声もある。
- (13) ニュー・イングランドにおけるバプテストに大きな影響を及ぼし、彼のセミナーは今日においても米国の福音主義神学会と福音派の教会に大きな影響力を持つ。ゴードンは奴隷制度反対に関して非常に厳しい立場をとり、また女性は教会においでも一般社会においでも男性と同様の権利と責任を負うべきと公言していた。Dayton, *Discovering An Evangelical Heritage*, 93.
- (14) A. J. Gordon, "Ministry of Women," *Missionary Review of the World* 7 (December, 1894).
- (15) バプテスト教会の場合は、各個人の神に対する直接的また主体的信仰を重視するバプテスト的信仰により、バプテスト教会において監督制にみられるような各個教会を統制する組織は存在しないし、各個教会に拘束力のある見解をまとめることもない。そのため女性教職問題において、バプテスト・コンヴェンションが肯定なり否定なりの声明を発表しても、それに沿つかどうかはあくまで各個教会の信仰的自由に任されている。その結果、女性教職に関してバプテスト教会として見解と実施に関してはかなりの幅が見られる。一方で女性教職による説教に喜んで耳を傾ける教会もあれば、批判的な

- 態度をとる教会もあった。なお、こうしたバプテスタの教会論と女性教職に関して、フレヴィンズが手頃なアウトラインを提供している。Carolyn DeArmond Blevins, "Women and the Baptist Experience," in *Religious Institutions and Women's Leadership: New Roles Inside the Mainstream* (Columbia, SC: University of South Carolina Press, 1996), 158-179.
- (17) エヴァンジェリカル・フリー教会の設立時の条例において、女性教職の存在は明らかに前提されており、一九二五年においてこの点は再確認され、以下のようになる一文が明記された。"a candidate for ordination shall request a reference from the church of which he or she is a member relative to the candidate's character, abilities, training and anything that pertains to his or her call."
- (18) フランソンは、エヴァンジェリカル・マライアンス・ミッション（TEAM）の設立者として著名。
 ムーディ聖書学校設立の背後にはエンマ・ドライヤーの大きな影響があった。彼女は元々はイリノイ州ノーマル大学の教師であったが、シカゴの大火後、同市で都市伝道と救済活動に動じむようになった。並行して聖書学校を開き訪問伝道などの訓練も行っていた彼女は、ムーディに聖書学校を開くよう働きかけ、一八八七年にムーディ自身も聖書教育と伝道者の訓練機関を始めた。ムーディ自身はクルセードのため欧米を旅行することが多かったことから、ムーディはドライヤーに彼のシカゴでの働きを監督させるようになった。後にドライヤーとムーディらは神癒の扱いを巡って対立し、両者はそれぞれ別個の働きを展開するようになったが、ドライヤーの影響無しにムーディ聖書学校はありえなかったとされる。Janette Hassey, *No Time for Silence* (Minneapolis, MN: Christians For Biblical Equality, 1986), 34-38.
- (20) 一九二六年には、ムーディ聖書学校と関連の深いレヴェル社から、聖書解釈の角度から女性教職の妥当性を論じた *The Bible Status of Woman* がリー・アンナ・スター（メソジスト・プロテスタント教会の牧師）によって出版された。
- (21) 教会の主要な目的とはキリストの贖いの福音を宣べ伝えることであり、実社会における問題に関わることは個人の救いと同列に並べるものではないとする考え方、あるいはソーシャル・ジスベルに対する批判は二十世紀の福音派の中においてよく聞かれたものである。例えば一九七三年、パリにおける会議が分裂し米国が北ベトナムの爆撃を再開し始めたとき、ニクソン大統領と比較的近い関係にあったブリー・グラハムに空爆中止を働きかけるようにとの声が高まった。それに応
- (22) えてグラハムは「Christianity Today」誌に寄稿し、「ある人たちは、伝道者とは社会問題や政治問題に深く関わるべきだと考えるが、私はそう理解しない。伝道者とは神の愛とイエス・キリストの恵み、そして悔い改めと信仰の必要性を伝える者である」と述べている。Billy Graham, "A Clarification," *Christianity Today*, 19 January 1973, p. 36. エドワード・ムーディ自身の晩年になつて、かつては社会的関心に重きを置きながらも悔い改めの手記を残している。W. H. Daniels, ed., *Moody: His Words, Work, and Workers* (New York, 1877), 431-432.
- (23) ブラウンチャードの反奴隷制の立場は当時の一般社会においては過激で反社会的とみられていた。彼はアンドルーヴァー神学校で学んでいたが、その奴隷制度反対の姿勢から退学させられ、その後彼は米国反奴隷制会において指導的な立場で活躍しつつ、反奴隷制で有名であったオハイオ州のシンシナティ市にあった第六長老教会の牧師をも務め、福音的信仰の伝播と社会悪との戦いにおいて著名なリーダーであった。同じく奴隷制反対の立場をとりつつも、段階的な廃止を目指していたN・L・ライスに対して、ブラウンチャードは論争を繰り広げ、奴隷制の即時撤廃を目指し妥協を許さない態度をとった。Dayton, *Discovering Evangelical Heritage*, 12.
- (24) 残念なことに、二十世紀以降に再版されたフィニーの著作は、こうした初期の社会問題への関心の部分が削除されている。例えば、W・レイモンド・エドマンの手記 *Finney Lives On!*、フィニーの *Lectures on Revivals of Religion* のアウトラインが提供されているが、リバイバルを押し進めようとするものについてフィニーの書いた二四項目のうち、社会改革について触れた二項目が削除されている。また、*Revival Fire on the Loose*、*Oberlin Evangelist*、およびフィニーが執筆した *Letters on Revivals* が収録されている。フィニーの生涯後期の思想が表れているが、"The Pernicious Attitude of the Church on the Reforms of the Age"の内容が別のものに差し替えられている。
- (25) 他に興味深いこととして、オックスリン大は、逃亡奴隷をかくまいカナダに亡命させる非合法組織の拠点でもあった。逃亡奴隷に対して州や連邦政府が厳しい法律を制定していくなかで、フィニーはこうした悪法に従うべき義務を神の民は持っていないと宣言した。オックスリン大の教授と学生らは、人に従うよりも神に従うとばかりに公権力に公然と反抗し、逃亡

- 奴隷を自宅に匿うなどした結果逮捕されることもあったが、あくまで奴隷制度反対の姿勢を貫いた。 Dayton, *Discovering An Evangelical Heritage*, 45-62.
- (26) 奴隷制と人種差別問題、また女性問題などの他に、経済的に困窮している人たちが孤児らへの伝道も当時の福音派は積極的に行なった。あまり知られていないことであるが、いわゆる自由主義系の社会派と呼ばれる流れの源流を辿っていくと十九世紀のリバイバル主義の神学者、活動家らの名前が挙がってくる。例えばローゼンブッシュは、初期の頃リバイバル主義系の教会と近い関係を持っていた。リバイバル主義系の書物を愛読し、当時スラムであったニューヨークのタイムズ・スクエアにて都市伝道を行っていたA・B・シンプソンの教会に出入りし、娘をオウベリン大に送るほどであった。後期の彼の神学はリバイバル主義と異なる面が多いが、初期の彼の神学と十九世紀リバイバル主義との間には非常に興味深い関係がある。
- (27) この姉妹は一般にクエーカーとして理解されるも、実際は少々複雑である。南部のエピスコパル教会から長老派系のリバイバル運動に加わり、その後クエーカーとなるも、アンジェリーナは長老派系の福音派リーダーの一人で奴隷制度反対運動を展開したセオドア・ウェルドと結婚した。属する教派のレッテルによってその個人の持つ神学的特徴を簡単に断じることのできない十九世紀米国の複雑なキリスト教会事情を示す一つの例である。 Dayton, *Discovering an Evangelical Heritage*, 89-91.
- (29) 学生たちは有色人種に対する学校を開き、日曜学校に招き入れ、経済的な援助も惜しまなかった。さらにこれら白人の学生たちは有色人種らと寝食をともにし、また白人男性の学生たちのグループが黒人の女性らと一緒にいることさえも行った。現在の感覚からすればそう不自然なことではないが、当時の感覚からすれば、とくに民族の純血にこだわる人種差別主義者になれば、レイン神学校の学生らの行動は常軌を逸脱した許されざる行動であった。
- (30) オウベリン大の初代学長は、レイン神学校の理事会の中で唯一学生らの奴隷正反対運動を支持していたアサ・マハーン。フィニーは、黒人学生の入学の是非を教授側に任せ、理事会が黒人学生受け容れに反対しないことを条件に教授への招きに応じた。これはオウベリン大学にとっては当然のことであったが、当時の高等教育機関においては非常に難しい問題であった。また当時、奴隷制反対論をかざす学生らは多くの場合学校の理事などといった保守的勢力から返学などの圧力を受けることが多く、オウベリン大学はそうしたことから奴隷制反対を主張する学生たち最後の皆的な様相も呈していた。 Dayton, *Discovering An Evangelical Heritage*, 40-43.
- (31) A・B・シンプソンは「[Christ's] humanity was unique and different from all other humanity. He is not a man, but He is the Man. He is not a male. He is just as much a woman as He is a man.」と述べた。上記は十九世紀リバイバル主義の中心人物の一人である。Lynn Hunt, *Madonnas in Mourning: Women in the Holiness Movement: Feminism in the Evangelical Tradition*, in *Women of Spirit: Female Leadership in the Jewish and Christian Traditions*, ed. Rosemary Ruether and Eleanor McLaughlin (New York: Simon and Schuster, 1979); Nancy Hardesty, *Women Called to Witness: Evangelical Feminism in the Nineteenth Century* (Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 1999).
- (32) 南北戦争を前後して、米国のリバイバル主義は千年期後再臨説から千年期前再臨説へと変わっていった。この千年期前再臨説は、現世に対する悲観的な視点により社会的関心の低下の土台となっていく見方もあるが、当時のリバイバル主義は、伝道と社会活動に邁進することによりキリストの再臨がすぐにも起きるとこの千年期観を持っていた。 Dayton, *Theological Roots of Pentecostalism*, 143-171.
- (34) デイトンは、俳優ジェイムス・デイーンの持っていた反骨精神が、当時のリバイバル主義の革新性によって育まれていたとする興味深い論文を発表し議論を呼んでいる。デイーンとクエーカー教徒らとの接点はしばしば指摘されてきたが、デイーンの育った環境にあったリバイバル主義の持っていた反社会的ともとれるディカルな革新性とデイーンの反骨精神とは確かに通じるところがある。 Donald W. Dayton, "James Dean, Popular Culture and Popular Religion: With Implications for the Study of American Evangelicalism" (paper presented at the annual meeting of the American Academy of Religion, Orlando, FL., November, 1998).

- (35) Dayton, *Discovering Evangelical Heritage*, 17-18.
- (36) 先に挙げたヒリー・グラハムやムーディにとどまらず、今日の福音派において社会的活動を個人の救いと同レベルで強調することに反対する声は多い。しかしその一方、社会全般の抱える数々の問題（刑務所伝道、都市伝道、家庭内暴力から酒類や薬物類、また賭博などの中毒問題など）に現在も積極的にミニストリーを展開しているのも福音派である。そうしたことばを考へると、福音派＝社会問題に関心が薄いとどう図式は今も昔も成り立たないことが解る。
- (37) Lee, "Women's Right to Preach the Gospel," in *Five Sermons and a Tract by Luther Lee*, 77-100.
- (38) この十九世紀に女性教職を踏み切った教会として、福音派の他にユニヴァーサルイズム系の教会があるが、この流れはペンテコステの女性教職論とは異なる。愛の神による平等性を論拠とした。ルーサー・リーは女性教職の推進者であったが、ユニヴァーサルイズムをその救拯論の故に批判しつつ、聖霊の満たしたの観点から女性教職の妥当性を論じた。ユニヴァーサルイズムとリバイバルイズムは十九世紀米国において女性教職をすすめた二つの大きな流れであるが、その神学的根拠は異なる。
- (39) フォービー・パーマーの生涯と神学に関する、Charles Edward White, *The Beauty of Holiness: Phoebe Palmer as Theologian, Revivalist, Feminist, and Humanitarian* (Grand Rapids: Zondervan, 1986); Harold E. Raser, *Phoebe Palmer: Her Life and Thought* (Lewiston, NY: Edwin Mellen Press, 1987); Thomas C. Oden, *Phoebe Palmer: Selected Writings* (New York: Paulist Press, 1988)など。
- (40) フリー・メソジスト教会の創設者B・T・ロバートは、一八九一年に*Ordaining Women*を著し女性教職を認める態度をとった。この時期に於ける女性教職擁護の立場からの聖書解釈として、この著作は比較的包括的に論じたものの一つである。現在これは北米フリー・メソジスト教会の公式ウェブサイトで(www.freemethodistchurch.org)にて閲覧可能である。
<http://www.freemethodistchurch.org/PDF%20Files/Resources/Ordaining%20Women.PDF>
- (41) ここではユニペンテコステの聖職者観とは、神からの召しに加えて、ペンテコステにての聖霊の満たしと同様の経験を持つことを基準とする聖職者観を指す。丁度ルターの神学が十字架の神学を中心に形成されていたように、十九世紀リバイバルイズムはペンテコステの神学がその中心にあり、聖職者観においてもペンテコステ的経験が大きな意味を持った。このペンテコステ的経験の強調が現在のペンテコスタリズムの勃興につながった。こうした十九世紀のリバイバルイズムと二十世紀のペンテコスタリズムの神学的つながりについて、ティーンズの*Theological Roots of Pentecostalism*が詳細な分析を行っている。
- (42) ティーンズは "In every great spiritual awakening in the history of Protestantism the impulse for Christian women to pray and witness for Christ in the public assembly has been found irrepresible." と述べた。
- (43) ヘンドロースは、十九世紀後半から米国福音派に顕著に見られたデイスペンサーショナリズムはフェミニズムと根本的に矛盾すると論じている。しかし、聖霊による救拯史の新しい段階を強調するデイスペンサーショナリズムこそが、女性教職論の神学的土台となった。二十世紀初頭の福音派は、千年期前再臨説を基とした歴史観を持っていた結果、この世界が良い方向へと進歩（進化）していくといった見方に否定的であった。これは確かにプロセス神学などの方向性と衝突することから、プロセス神学に結びついたタイプのフェミニズム神学と千年期前再臨説を強調する流れは互いに相容れない。しかし、デイスペンサーショナリズムの故に千年期前再臨説をとらねばならない神学的必然性は存在せず、また千年期前再臨説を強調する流れにおいてさえ、その流れ独自のフェミニズムの強調が展開されていることから、ヘンドロースの指摘はプロセス神学系のフェミニズムと千年期前再臨説派との関係に限って理解するところが適切と思われる。参照 Margaret Lamberts Bartoh, *Fundamentalism and Gender: 1875 to the Present* (New Haven: Yale University Press, 1993).
- (44) 当時の女性教職を推す神学的根拠にも一つ代表的なものとして、天地創造時における愛の平等性というものもあった。これは特にユニテリアン系で論じられることが多く、リバイバルイズム系も若干触れていた。しかし、リバイバルイズム系の教会はそのデイスペンサーショナリズムの歴史観から創造時よりもペンテコステ以降を重視していたことにより、この神

- 学的主張はあまり用いらなかった。
- (45) いくつかのリサーチは福音派の持つこの複雑さを見落としている。例えばヘンドロースは、ファンダメンタリズム系の教会は二十世紀初頭において二五パーセントの女性教職しか許していないほど女性差別が根強いと理解する。しかし当時の一般社会における女性の地位、そしてメイソンの教会において女性教職は存在しなかったことを考えると、逆にこのファンダメンタリズム系の教会がいかに女性教職に対し肯定的であったかを示している。参照:Bendroth, *Fundamentalism and Gender: 1875 to the Present*.
- (46) 同じく十九世紀の米国福音派のグラス・ルーシの体質についてネイサン・ハッチが綿密なりサーチを提供している。ハッチの著書は「For two centuries Americans have refused to defer sensitive matters of conscience to the staid raduates of Harvard, Yale, and Princeton. They have taken faith into their own hands and molded it according to the aspirations of everyday life. American Christianity continues to be powered by ordinary people and by the contagious spirit of their efforts to storm heaven by the back door.」と述べている。これは少々極端なものかもしれないが、神学者や教会のヒエラルキーの頂点に位置するエリートイズム主導のキリスト教ではなく普通の人々のキリスト教として発展してきたアメリカの福音派の体質を指摘する興味深いリサーチの一つである。Nathan Hatch, *The Democratization of American Christianity* (New Haven: Yale University Press, 1989), 219.
- (47) もちろん、これにまつ多くの女性たちが正規の長きとつ活動を開始したことが次のステップに大きな役割を果たした。Elisabeth Lunz, "Introduction" in *Voices of Experience: Lifestories of Clergywomen in the Presbyterian Church* (U.S.A.), edited by Alice Brasfield and Elisabeth Lunz (Louisville: Women's Ministry Unit, 1991), 1.
- (48) Minutes of the General Assembly, 1953, 24.
- (49) 同じく注意しておきたいが、これは監督制などとは全く異なる政治システムを持ったバプテリストらのコンヴェンションでの声であり、全てのササン・バプテリストらがそう確信しているかどうかは別問題である。ただ、福音派における一つの声として引用した。
- (50) Donald W. Dayton and Lucille Sider Dayton, "Women as Preachers: Evangelical Precedents" *Christianity Today* 19 (23 May 1975): 7. Hassey, *No Time For Silence*, 137-143; Stanley, "The Promise Fulfilled," 148-150.
- (51) レベッカ・レポートはナザレン教会の女性教職の実状に関して、セミナリー教育の要求が女性教職数を増やしていくにあたっての障壁となっていることをリサーチし、修士論文として一九九〇年にパシフィック・スクール・オブ・レリジョンに提出している。これは後に出版された。Rebecca Laird, *Ordained Women in the Church of the Nazarene: The First Generation* (Kansas City: Nazarene Publishing House, 1993).
- (52) 例えばビリー・グラハムの妻であるルース・グラハムは「Christianity Today」誌に寄稿し、「私は個人的に女性教職に反対です。確かに私たち女性が男性よりも劣っているとは思いません。けれども女性教職は聖書の原則に背いています。それによく似ただけならば解るかと思いますが、世界で最も優れた料理人やファッションデザイナーらは大体男性です。偉大な政治家は男性ですし、立派な作家や運動選手らも男性です。けれども、男性にはどうしても太刀打ちできないことがあリます。女性こそが立派な妻となり、また母となることです。」と述べている。Ruth Graham, "Others Say ...: *Christianity Today* 6 (June 1975): 32. 程度の差こそあれ、アメリカの保守的な教会に同じくした論調がよみみられる。
- (53) Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 4, 146.
- (54) Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 91-92.
- (55) 例えば女性教職を押し進める大会がホーリネス系の教団によって定期的に共催されている。主催教団は、チャーチ・オブ・ゴッド(アンダーソン)、ナザレン教会、北米フリー・メソジスト教会、ウエスレアン教会、エヴァンジェリカル・フレンズ・インターナショナル、そして救世軍(米国西部)などであり、プレスレン・イン・クワイーストも協賛している。改革派系でもエヴァンジェリカル・カウナント教会やリフォームド・チャーチ・イン・アメリカなども女性教職を認めてきている。その一方、先に挙げたササン・バプテストの他、改革派系ではいち早く女性教職を認めていたエヴァンジェリカル・フリー教会も女性教職を認めなくなった。

(56) こうした理解は、特に福音派以外の手にあるリサーチにおいてもしばしば見られる。例えばシャウスは、サゼン・バプテスマを例にとり聖書の権威を主張する教会は反女性教職であると論じている。十九世紀のリバイバルズムが女性教職に積極的であったことは認めつつも、これらの流れが聖書信仰の流れの主流派ではないことがその論拠である。確かにリバイバルズムは、ファンダメンタリズムとネオ・エヴァンジェリカルイズムの神学者からの批判の対象となることが多かった。しかし、二十世紀初頭のいわゆるファンダメンタリズム的な教会は女性教職を認めており、また最近のネオ・エヴァンジェリカルイズム正統派的教会、また聖書信仰の代表的団体、ナショナル・マンシエーション・オブ・エヴァンジェリカルズの加盟教会の多くが女性教職を認めており、このことをきえる。聖書信仰即女性教職反対とする見方は現実に即していないことが解る。福音派の一部の聖書学者は、福音派全体の複雑な歴史を構造的に捉えないう例の一例である。参照Mark

Chaves, *Ordaining Women: Culture and Conflict in Religious Organizations* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1997).

参考文献

- Allen, Catherine B. *A Century to Celebrate*. Birmingham: Woman's Missionary Union, 1987.
- Brasfield, Alice and Elisabeth Lutz, ed. *Voices of Experience: Lifestories of Clergwomen in the Presbyterian Church (U.S.A.)*. Louisville: Women's Ministry Unit, 1991.
- Bendroth, Margaret Lamberts. *Fundamentalism and Gender: 1875 to Present*. New Haven: Yale University Press, 1993.
- Bishop, Sarah. "Should Women Preach?," *Gospel Trumpet* 40 (17 June 1920): 7-15.
- Carpenter, Joel A. *Revive Us Again: The Reawakening of American Fundamentalism*. New York: Oxford University Press, 1997.
- Chaves, Mark. *Ordaining Women: Culture and Conflict in Religious Organizations*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1997.
- Dayton, Donald W. *Discovering An Evangelical Heritage*. Peabody, MA: Hendrickson Publishers, 1976.
- . *Theological Roots of Pentecostalism*. Matuchen, NJ: Scarecrow Press, 1987.
- , ed. *Five Sermons and a Tract by Luther Lee*. Chicago: Holrad House, 1975.
- , ed. *Holiness Tracts Defending the Ministry of Women*. New York: Garland Pub., 1985.
- Dayton, Donald W. and Robert K. Johnston, ed. *The Variety of American Evangelicalism*. Knoxville: University of Tennessee Press, 1991.
- Dayton, Donald W. and Lucille Sider Dayton, "Women as Preachers: Evangelical Precedents," *Christianity Today* 19 (23 May 1975): 4-7.
- , "Your Daughters Shall Prophesy: Feminism in the Holiness Movement" *Methodist History* 14 (1975): 67-92.
- DeBerg, Betty A. *Ungodly Women: Gender and the First Wave of American Fundamentalism*. Minneapolis: Fortress Press, 1990.
- Douglas, Jane Dempsey. *Women, Freedom, and Calvin: The 1983 Annie Kirkhead Warfield Lectures*. Philadelphia: Westminster Press, 1985.
- Frederick W. Schmidt, Jr. *A Still Small Voice: Women, Ordination, and the Church*. Edited by Amanda Porterfield and Mary Farrell Bednarowski, *Women and Gender in North American Religions*. Syracuse, NY: Syracuse University Press, 1996.
- Hardesty, Nancy A. *Women Called to Witness: Evangelical Feminism in the Nineteenth Century*. 2nd ed. Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 1999.
- Hassey, Janette. *No Time For Silence: Evangelical Women in Public Ministry Around the Turn of the Century*. Minneapolis, MN: Christians For Biblical Equality, 1986.
- Hatch, Nathan. *The Democratization of American Christianity*. New Haven: Yale University Press, 1989.
- . "Taking the Measure of the Evangelical Resurgence, 1942-1992." *In Reckoning the Past: Historical Essays on American Evangelicalism from the Institute for the Study of American Evangelicalism*. Edited by D. G. Hart. Grand Rapids: Baker Book House, 1995. Originally delivered from "Can Evangelicalism Survive Its Success?" *In Christianity Today* (October 1992): 21-31.

- . "The Puzzle of American Methodism." *Church History* 63 (1994): 175-89.
- Hays, Elinor Rice. *Those Extraordinary Blackwells*. New York: Harcourt, Brace and World, 1967.
- Howe, E. Margaret. *Woman and Church Leadership*. Grand Rapids: Zondervan, 1982.
- Hunter, Fannie McDowell. *Women Preachers*. Dallas: Berachan Printing, 1905.
- Kerr, Laura. *Lady in the Pulpit*. New York: Woman's Press, 1951.
- Kraditor, Aileen S. *Means and Ends in American Abolitionism*. New York: Pantheon Books, 1969.
- Laird, Rebecca. *Ordained Women in the Church of the Nazarene: The First Generation*. Kansas City: Nazarene Publishing House, 1993.
- Leonard, Juanita Evans. *Called to Minister: Empowered to Serve*. Anderson, IN: Warner Press, 1989.
- Marsden, George M. *Fundamentalism and American Culture: The Shaping of Twentieth-century Evangelicalism 1870-1925*. New York: Oxford University Press, 1980.
- Melton, J. Gordon, ed. *The Churches Speak On: Women's Ordination*. Detroit: Gale Research, 1991.
- Murdoch, Norman H. "Female Ministry in the Thought and Work of Catherine Booth." *Church History* 53 (September 1984): 355.
- Nesbitt, Paula D. *Feminization of the Clergy in America: Occupational and Organizational Perspectives*. New York: Oxford University Press, 1997.
- Oden, Thomas C. *Phoebe Palmer: Selected Writings*. New York: Paulist Press, 1988.
- Raser, Harold E. Phoebe Palmer: *Her Life and Thought*. Lewiston, NY: Edwin Mellen Press, 1987.
- Roberts, Benjamin Tius. *Ordaining Women*. Rochester: Earnest Christian Publishing House, 1891. Reprinted from Light and Life Press in Indianapolis, 1992.
- Ruether, Rosemary and Eleanor McLaughlin, ed. *Women of Spirit: Female Leadership in the Jewish and Christian Traditions*. New York: Simon and Schuster, 1979.
- Sandeen, Ernest R. *The Roots of Fundamentalism*. Chicago: The University of Chicago Press, 1970.
- Stanley, Susie Cunningham. *Feminist Pillar of Fire: The Life of Alma White*. Cleveland, OH: Pilgrim Press, 1993.
- Wessinger, Catherine, ed. *Religious Institutions and Women's Leadership: New Roles inside the Mainstream*. Edited by Frederick M. Denny. Studies in Comparative Religion. Columbia, SC: University of South Carolina Press, 1996.
- White, Charles Edward. *The Beauty of Holiness: Phoebe Palmer as Theologian, Revivalist, Feminist, and Humanitarian*. Grand Rapids: Zondervan, 1986.

(インディアナ州福音派教会牧師・ドルー大学博士課程在学)